学校臨床心理学論考

－　組織の変容に寄与するカウンセラーの仕事について　－

教育相談室長　　藪 添　隆 一

【要旨】　当センター教育相談事業で実施している教師面接及び一日スクールカウンセリングの経験から，個から集団に波及するカウンセリング的影響を観ることができた。家族システムズアプローチは家族を一つの有機体としてとらえる。これを学校組織に適用し，学校システムにアプローチするコンサルテーションの可能性を考えたい。

【キーワード】　学校コンサルテーション，システム，コミュニケーションパターン，エンカウンターグループ，インタレスト，不適応，無条件，愛着，依存，遊び心

1　はじめに

元来，心理臨床家は他人の個人的な悩みを，個人として聴く職業であった。ところが，学校にスクールカウンセラーが配置されるようになった現在，学校という組織の中での心理臨床が新しい課題を持つに至ったようである。

それは，「組織の中に於ける対個人的仕事のあり方」ばかりでなく，「対集団的，対組織的仕事のあり方」という，本来教師が専らとするスタンスをカウンセラーがどのように獲得し，集団と組織にどのように寄与できるかという課題だと思うのである。

この課題について論じてみたいと思うのは，心理臨床家に寄与できる教育行政の一員としての私自身のスタンスを確かめてみたいことに由来する。そうすることによって，私の仕事であるところの学校コンサルテーションを理論化する手がかりを得ることができるかも知れないとも思うのである。

2　教師面接の事例から

ある小学校に赴任したＡ教諭（40歳男性）は，その学校に赴任した日から，先生方にも生徒たちにも何ともいえない緊張を感じたそうである。笑顔がない，遊びがない，生真面目すぎる。こんなところに勤めていては自分も次第に笑わなくなってしまうのではないか，冗談の一つも言おうとしても言う気がしなくなるような雰囲気からそう思ってしまったそうである。

ただ例外的にＡ先生をほっとさせてくれる存在たちがいた。低学年の男児三人組である。彼らは授業中でも廊下を走っていたり，体育館の裏で「基地ごっこ」をしていたりで，他の先生方は指導のしようが無いと嘆いている問題児だった。

この学校は三人組を放任していたのではない。必ず誰か先生が側についているようにしていて，教室に入れようと指導していたのだった。ところが先述の緊張と生真面目が災いして，よけいに三人組の「敵」に仕立て上げられる始末だった。

Ａ先生はもともと非行タイプの人で，学生時代には手下を何人も引き連れる親分だったそうである。この三人組と廊下で二言三言やりとりがあっただけで，三人はＡ先生の子分になってしまった。これを見て手を焼いていた先生方が感謝したのは当然のことだった。

親分は親の代理人である。三人の子分たちは親分の行くところならどこへでもついて来た。このカルガモの一行がこの学校に与えたユーモラスな雰囲気の効用は計り知れないものがあったはずである。

もともと，三人組は緊迫したこの学校の雰囲気に対するアンチテーゼであったはずなのだが，親分先生がいない時には単なる弱者に過ぎず，厄介者グループでしかなかったのだ。一般に非行グループは「家なき子」たちがつくる疑似家族である。大人の疑似家族集団は「何々一家」と名乗る。親の代わりが親分，姉（あね）さん，兄貴分と組織は家族的である。一家の躾は厳格であり，作法，義理を尊ぶので本当の家族以上に礼儀正しく団結している。ところが，それは身内に限っての話で，一家の外では悪事の限りを尽くす生業に精を出す暴力団である。しかし，ホームルームからはみ出した子どもたちを集団に導く仕事として，善い先生が親分になり疑似家族的グループを形成すれば，ことのほか効果的であるといえよう。人情の通い合う家庭に育つことができなかった子どもたちへの特効薬は一緒にいるだけで元気が出るような人情の交流なのである。

実は，この学校の堅さ，生真面目さ，緊張感に支配された雰囲気の背景には，かつて起こった深刻な人身事故の一件があったのである。それは学校内で起きた児童の死亡事故であった。それも原因不明，推定発生時刻は放課後であった。死因すら特定困難とされる事故であったので，当時の教職員の心の傷は深く，知らず知らずのうちに人情の枯渇が起きていたのだった。内向的な先生は鬱（うつ）的となり，外向的な先生はアグレッシブとなっていったのだった。雑談は無くなり議論が増えていった。

このような事態を憂慮した学校長はＡ先生を職員として迎えた。その結果として疑似家族カルガモ一家は学校に微笑を発生させた。成長し始めた三人が次第にホームルームに入るようになり，代わりの弱者たちがＡ先生にまとわりつくようになり，Ａ先生は校内移動カウンセラーとして有り難がられる存在となっていったのだった。これに加えて，同僚や保護者がＡ先生に「相談」という心の栄養補給を求めるようになったのは言うまでもない。学校に人情という血液が循環し始めて組織の心的外傷は癒えていったのである。

あれから７年経った。私は最近ある中学校の男性教諭Ｂ先生の相談に応じた。Ｂ先生は「今年の一年生は今までと全然違う」と悩んでいたのだった。どう違うのかは「うまく言えないほど微妙な問題」なのでＢ先生は４月からの出来事の概略を記した資料と生徒たちのプロフィールと最近みた夢の記録を持ってきた。自分の夢を持って来なければ伝わらないと感じられる微妙な悩み。どこがかゆいのか自分の体なのにはっきりしない時のようなもどかしさ。どうやら，そんな微妙で奇妙な感じにさせられていると言うのである。

Ｂ先生の面接中に私はふと７年前の，というか，以前Ａ先生から聞いたことのあるカルガモ三人組の学校の雰囲気を連想したのだ。Ｂ先生の中学校と近所の小学校なのであるが，長らく忘れていたあの小学校のＡ先生から聞いて感じた，堅苦しいイメージが蘇ってきたのである。あの不可解な死亡事故のあった当時，あなたの担任している中学生たちは，あの小学校にいたのではないか？と尋ねると，まさしく，生徒たちはあの死亡事故のあった年の翌年にあの小学校に入学しているはずだとＢ先生は言うのだ。つまり，この学年はＡ先生と共にこの小学校にやってきたということになる。

中１のその学年は，叱らない先生の授業では騒がしい。まるで小学１年生のような幼

い騒ぎ方をする。叱りつけるのが得意な先生の前では大人しいので，叱るのが苦手なＢ先生は自分も叱るべきかと悩んでいる。叱ってみたときもあったが，効果はしばらく続いただけで躾にもならない感じがする。反対に，小さい子どもに接する要領で優しく相手すると，この子たちは実に人なつっこいのだ。本当に一人一人は可愛いのだが，担任として型どおりの指導をしていると突然，教室のガラスを割る事件や同級生の財布から金が無くなったりすることが起こる。だから，Ｂ先生はこの子たちに気持ちをつなぎ続ける努力を要求され続けるのだ。気持ちをつなぐ，と言えば聞こえはいい。しかし実際に気持ちをつなぐとは，対象に心を寄せ，悩み，犠牲を払うことなのだ。いったん気持ちを寄せてもらった子どもたちは，また悩んでくれとばかりに問題を起こすのだ。

Ｂ先生は，入学してきた当初から幼児のような彼らに悩み，心を寄せていた。しかし，「甘やかすからそんなことになるんだ」と言わんばかりのタカ派の先生に自らを比べて自分が情けなくなるときもあった。

そういえば，当時，Ａ先生はこう言っていた。

「事故の影響なのか，教師が児童に接する場面で，腫れ物に触るような態度が見受けられました」

「教師集団が，子どもを厳しく叱るのはよくないという意見と，厳しく管理監督すべしという意見の両派閥に分かれてしまっています」

この７年前の小学校での現象とそっくりそのままの現象が中学校で起きていることに私は気づいたのである。

いじめられっ子の中には，転校しても進学しても以前とよく似た被害に遭うことを繰り返す一群がある。いじめ問題に限らず，人間には相手が代わっても同様の反応を相手から引き出す個性があることは周知のことと思うが，このような個人的要素は，集団の場合にも共通してあるのではないだろうか。一定の学年が小学校から中学校にそのまま進学する地域においては，同一の学年集団特有の性格，個性が指摘されることが多いように思われる。

このように考えてみると，７年前にＡ先生が小学３年のカルガモ君たちとかかわった効果は翌年に入学する１年生までには及んでいなかったとはいえ，この学年が中１になった時点で同じ効果を享受する機会が訪れたとも言えるのではないだろうか。もちろん，Ａ先生の場合とかかわり方は異なってくる。

Ａ先生は小学校の他の先生とは全く違った個性として彼らの前に現れた。Ａ先生の個性は「親分」だった。群れの一員としてああすべきかこうすべきか迷ったり議論する人ではなかった。ついてこいと命令せず，ついて行きたくなる人だった。子ども，大人にかかわらず，話を聴いてくれて，「そうそう，それよな！」と支持してくれるだけの人だった。

Ａ先生は一年間小学校にいただけで，教育委員会の教育相談担当者になって転勤した。カルガモたちはＡ先生と別れた後，クラス集団に戻ったそうである。勉強もするようになったそうである。なぜかと人に尋ねられて三人は口をそろえて，「そうそう，それよな！」とだけ答えてにこにこしていたそうである。

では，同じ効果を期待してＢ先生は何をしなければならないのか？Ｂ先生がＡ先生のまねをしても無理というものである。そもそも個性が違うのである。違うから個性なのである。

「厳しい指導」か「優しく接する」か，あれかこれかを議論し，「方法」を決定しようとする人たちはすでに個性を捨てている。こと人間に関する方法は，方法を実行する当人の個性に裏打ちされたものでなければ百害あって一利もない。Ｂ先生は，Ｂ先生の個性で対応すればよいのである。

対人関係の方法論（doing）は存在論（being）である。７年前の事故のことについて私は詳しく知るよしもないのだが，一人の子どもの「存在の喪失」であること，この真実に焦点を当てて考察を深めたい。子どもは存在感のある大人の個性によってその存在が守られる。大人の集団が形式的な制度やマニュアルに縛られすぎて，没個性的な状態に陥っていると，子どもを心理的に守る力が弱くなるのではないだろうか。没個性的マニュアル教育は子どもの存在を危うくするのである。

先述のとおり，Ｂ先生は自分の夢を記録して持参した。

＜夢１＞　私の担任するクラスのＣ君が加害者であることがわかった。Ｃ君は被害者のＤ君に謝りたいと言う。生徒同士のやりとりだけで済ますことのできない事件なので，私はＣ君の母親に電話した。母子でＤ君の家にあやまりに行ってほしいと言った。母親は嫌だと言う。忙しいから，とにべもなく断られた。腹が立って夢から覚める。

実際にこのような場合，中学校では家に電話して，保護者にあやまりに行ってもらうのだそうである。なぜ腹が立ったのかとＢ先生に尋ねると，保護者が恐縮してわが子を連れて相手方にわびに行くのが当たり前なのに，にべもなく断るとは何と利己的な人だと感じて腹が立ったのだとＢ先生は言った。

夢には現実の裏側，つまり非現実の側に潜む本音がイメージとして出現する。この夢の場合，「腹立ち」がＢ先生の本音だった。親が親らしくしてくれない，との腹立ちはＢ先生の親心から出たものである。しかし，学校の常識（マニュアル）がそのまま夢に出るあたりは，まだまだ没個性的な段階だと私は思った。

Ｂ先生は，次の面接にも夢を持ってきた。

＜夢２＞　親が行かないのなら私が行こうと，Ｃ君を連れてＤ君の家に謝りに行く。こんなことになったのは，担任として私の責任ですと，Ｄ君と両親に謝った。

学校で起こったことは学校の責任である。謝るべきは，加害者の保護者よりも担任だろう。Ｂ先生は学校の常識（マニュアル）を超えた。＜夢１＞の腹立ちの力によって，彼の個性が発現したのである。個性は深いレベルで普遍とつながっている。普遍的真実が社会性という壁を越えた場合，それを個性の発露と言うのである。

Ｂ先生は＜夢２＞以外にも連夜みた夢を幾つか持参していた。次の夢も印象的なものだった。

＜夢３＞　私は南国の海岸にいる。女たちと遊んでいる。

そこへ大津波が来るのかと不吉な予想が私に浮かんだが杞憂だった。Ｂ先生は生きる方向性に向かい始めたのだろう。南国の大津波は死神のようだった。その災厄を連想させる舞台を選びながらＢ先生は生を謳歌するのだ。「エロース（Eros）」の夢なのだ。死神に取り憑かれた状態，つまり「タナトス（Thanatos）」と対抗するようなイメージがここにはある。

夢を語り終えてＢ先生は「実は」と語り始めた。Ｂ先生は今年迎える誕生日で父上が亡くなった年齢と同じになるのだという。また，去年，生徒たちが様々なトラブルを起こした時期にはご家族の病気が重なっていたという。病と死のイメージと闘っているときに生徒たちが騒いでいたというのだ。この生徒たちが小学１年生の頃に，学校全体が

タナトスにやられていたことを思えば，生徒たちは騒ぐことでエロース（生きる力）を守っていたのかもしれないと私は思った。それが担任の心がタナトスにやられかけているときにぶり返したとみることはできないだろうか。お祭りは生命の爆発を招いて災厄を消し去る。

日常の学校生活で祭りをやれば問題行動なのだが，集団の無意識は祭りを求めていたのかもしれない。その問題行動の一端を採りあげて，抑圧からの解放，怒りを夢で味わった後に親心の発露が出現して命の楽園にＢ先生は到達したのかもしれない。

現実に生徒たちの様子はどうですか？と尋ねてみた。

「それが，今までになく落ち着いているのです。みんな楽しそうです」とのことであった。

これからＢ先生が何をすべきか，という問題の大半はすでに解決しているのである。

学校システムは個人システムと直結しているのである。コンサルテーションは通常，個人のパーソナリティーに触れないことになっている。しかし，あえて教師個人の深層心理に触れていくことで，学校システムの深層が次第に明らかとなっていく。一人の教師の存在が明確化し，生徒たちの集団が同時に明確化しはじめる。それはあたかも，微小な腫瘍が快癒すると同時に人体システム全体が調子を取り戻すかのようである。もちろん，事例に登場する人物を腫瘍に喩えているわけではない。Ｂ先生の不安材料がそれに匹敵するのであり，不安の根が取れることで学校システムの不安が消えていくのだ。不安の根とは，この場合，フロイトが指摘したところの「タナトス」なのであったし，これを共に掘り下げて摘出することが生徒集団の生きる力を引き出すことにつながるはずである。

３　対集団の理論背景

和歌山県教育研修センター教育相談室では，これまでに述べてきたように，教職員（場合によっては職員集団・家族・本人）の来談に応じる面接を主として実施している。つまり，ニーズのある人が自主的に相談に来る形式を基本としているのである。

悩んでいる子ども本人とカウンセラーの二者関係は伝統的カウンセリング形態である。ところが，子ども本人が自主的に来談することは希であり，保護者（特に母親）とカウンセラーによる面接形態がニーズの点からも最も多い。しかし，この二つの形態だけでは子どもの問題が学校から隔離されて取り扱われるために，教師及び学校の協力と変容は期待しがたい。そこで子どもの問題について学校長が申し込み，教員（チーム）が来談する教育相談形態は多くの可能性を秘めている。特に前述のとおり，来談した教師の面接を通して学校について見立てを行いながら，面接の回を重ねるごとに学校の変容への寄与が期待できることを本論で強調したいのである。

話を保護者面接に戻す。

保護者の相談を受ける教育相談には二つの要素がある。ガイダンス（指導）とカウンセリング（心理面接）の二要素である。前者は知識的な答えを求められて教えること，後者は心理的援助することを主たる目的とする。教育行政及び教育現場で「教育相談」と呼ぶ場合，この両者を総合的にイメージしつつ，前者を経験的に知る人の方が後者に比べて多いために，「教育相談」をガイダンスとしてのみ認識する人も多く，教育について経験豊富だというだけで安易に相談員を任命したり，引き受けたりする場合が多いのである。

さて，心理面接としての保護者カウンセリングを深く考えてみると，たとえば母親一

人を継続して面接していくための専門性として，家族全体を見立て変容を期待する技能が必要であると思う。

臨床心理学の比較的新しい流派である家族療法の方法は，システムズアプローチと呼ばれ，家族を一つの有機体と見なす。実際，システムズアプローチの面接は，家族全員が相談室に通ってくる。カウンセラーは目の前に坐っている。面接室ではひとりのカウンセラーが対応するが，部屋の壁にマジックミラーとマイクがあり，隣の観察室から他のスタッフが面接を観察している。なぜならば，そこでは問題（不登校，非行，心身症等）を顕在化している一人の家族を問題視するのではなく，家族相互で交わされるコミュニケーションパターンを重視するからである。たとえば，父親が一人演説して母親が迎合的にうなずき，母親がうなずくのをやめて娘をじっと見つめる，ということが繰り返され，娘はその都度，隣に座っている弟の足を蹴る。このようなパターンをカウンセラー及び観察スタッフが発見し，このパターンを変える方策をとる。家族全員の面接が回を重ねて実施されるうちに，その他のパターンも変更されていく。母親が話すのを父親がうなずいて聴き，弟が鼻歌を歌い出し，姉が足先でリズムを刻む，というようにである。これだけで娘の症状が消えるのであるが，娘の不登校を治すために集まっているつもりだった他の家族個々の性癖や相互関係も同時に改善される。つまり個の問題解決を結果的に招来することができるのである。

さて，家族療法の正統的方法は，このように家族全員が面接室に来談することや，マジックミラー付きの施設及び専門家チーム等の大がかりな舞台設定を必要とする。ところが，家族療法とはシステムズアプローチという理論と技法なのであって，必ずしも家族全員を相手にしなくとも，たとえ一人の家族を面接するだけであっても家族療法は可能であるとする認識が専らとなりつつあるという。一人の母親が問題の娘のことで相談しても，たった一人のカウンセラーがこれに応じていて，その部屋はマジックミラーも何も無いふつうの部屋であっても，母親の家族の動きと相互関係，及びそのコミュニケーションパターンをイメージしながら，自分の中の様々な視点を「スタッフ」として活性化させ，この母親を通して家族の変容を目指しているならば，それは立派なシステムズアプローチなのである。

これと同様のことが学校現場に適用できないだろうか，との発想が本稿のねらいなのである。つまり，一人の母親と面接することによって家族の変容を目指すように，一人の教員の面接によって学校の変容を目指すことも可能なのではないか，とのねらいに基づいて先の事例を挙げたわけである。

では次に，「たった一日のスクールカウンセリング」でどれほどのスクール・システムズアプローチが可能か，について考えたい。この場合，カウンセラーが一人で学校に入り，朝の始業から夕刻の放課後までに何ができて，何が起こるかという実験である。つまり，自主的な来談教師を通してする形態を直接的な訪問形態の場合に代えて，システムへの関与のあり方とその影響を考えてみたいのである。

4　一日スクールカウンセラーの経験（その１）

平成15年度，教育委員会のカウンセラーとして，和歌山県内の全高等学校を訪問することにした。訪問するカウンセラーは相談課長の私と教育相談主事２人の計３人で手分けして１校に１日ずつかけて訪問する。職員朝礼で挨拶し，管理職と相談担当教員との懇談の後は学校が事前に決めたスケジュールで活動する。「私に何がしてあげられますか？」を基本姿勢としているのだ。

朝，相談係Ｅ子先生に案内されて生徒相談室に入った。保護者にも案内したのだが希望は無かったが，生徒にも知らせてあるのでこの部屋に相談に来るかもしれない，と言う。もう一人の相談係Ｆ子先生とＧ子養護教諭もやってきた。三人は，今日の来談希望者が無かったことを口々に申し訳ないと言う。私は＜ところで，あなたがたはどこで相談活動をなさっているのですか？＞と尋ねた。Ｅ「相談活動などと言えるほどの専門性は私たちにありませんので，問題を抱えた生徒が溜まる保健室に常駐して，生徒たちの相手をしています」＜生徒の気持ちを聴くことができる人の居るところが相談室です。私も保健室に入れて下さい＞Ｇ「そんなことなら掃除しておくんだったわ」＜普段の状態の保健室の方がいいです。水清ければ不魚住。魚の居ない相談室に網を張っていても仕方がない＞とか言いながら，私は今日の一日を保健室で過ごすことにしたのだった。

一時間目の授業が始まって２０分経過した時に「暑い，たまらんわ。頭も痛い」と入ってきた男の子は私に気が付き，Ｇ子先生に「あの人だれ？」と言う。＜やぶぞえです。よろしく＞と挨拶すると「あっ。おれ，Ｔです」と言いながらＧに「何する人？」と小声で尋ねた。「カウンセラーの先生よ」「ふーん。よっしゃ」と私の横に来て，「僕，学校やめたいんです。って言うたら，どう答えるんですか？」＜やめたいのだったら，やめなさい＞「そんなんカウンセラーとちがうやん」とショックを受けた様子で，「ああ，授業に行ってきまーす」と出て行った。Ｔ君は３年の留年生で，去年は授業中に座っていることができないほど落ち着きがなかったこと，今年はあれでも落ち着いてきた方だとＥ，Ｆ，Ｇ三先生から聞く。私は，＜本人が決める前に決めつける親をもっている子？＞と尋ねる。「そのとおりですが，なんでわかったのですか？」＜退学を引き留めるのがカウンセラーの役目だと思い込んでいたでしょう。礼儀も知っているから親は教育熱心だとわかります＞と解説する。

超ミニスカート制服の少女Ｐ子さんが入ってきた。「カウンセラーさんですか？」＜はい。Ｔ君から聞いて来てくれたんですね＞「はい。私の悩みを聞いてくれますか？」＜どうぞ＞「親が浮気しているのを知ってしもてん」＜親って？＞「お母さんよ。お母さんのケータイのメールでわかったんよ」＜ショックやねえ＞「そうなんよ。ショックや。たまらんわ」＜ほんまにね＞「授業に行ってきまーす。せんせ，ありがとう」＜いえいえ＞「またね」と出て行った。声を潜めることもなく，Ｅ，Ｆ，Ｇ三先生方にも聞かせてアッケラカンと１分足らずで出て行った。＜掛け替えのない相手が無い，寂しい子です＞Ｇ「両親は再婚で，あの子は母親の連れ子。父親は成績の点数ばかり言う人です。明るすぎてね。寂しいのに」＜ほんとにそうです。お母さんもそんな人でしょう＞「そうです。そっくりです。でもどうしてわかったのですか？」＜秘密を持つことのできない親子だからです。掛け替えのない親子関係に恵まれていないと，親密な特別の人間関係を持つことがむつかしい人になります＞「Ｐ子さんもあぶなっかしくてね。どうしてあげたらいいのですか？」＜唯一無二の関係になってあげることです＞「むつかしいですね」＜むつかしいです＞と説明している間に１時間目が終了したとみえてＴ君がまたやって来た。

もう一人の男子Ｏ君を連れている。私の横の椅子に座り「先生，僕，死にたいんです」＜どうして？＞「死んでもいいですか？」＜死んではいけません＞「なんでよ。さっきは退学しなさいって言うたのに」＜退学と死ぬことと同じか？＞ふん，と向こうのソファーに行って寝ころんでしまう。Ｏ君は一部始終を見届けていて近寄ってきた。「カウンセラーですか？」＜はい＞「僕は３年２組のＯです」＜やぶぞえです＞「先生の給料は高い？」＜ここの先生方と同じ＞「教育委員会の人？」＜そう＞「今日の仕事はなに？」＜ここでカウンセリングすること＞「カウンセリングすると生徒はどうなるの？悩みがとれる？」＜とれる場合と，ちゃんと悩むようになる場合とあるよ＞「そうか，

Ｔはちゃんと悩みだしたんやな」＜そうみたいやね＞と，そのときソファーから「Ｏ！なにごちゃごちゃ他人のこと言うてんねん。自分の悩みを言わんかい」とＴが怒鳴って授業に出かけて行った。Ｏもあわてて出て行った。

３時間目，女性担任Ｈ子先生から相談したい旨，保健室に電話で打診があった。相談場所は保健室のソファーでよいと言う。Ｅ，Ｆ，Ｇの三先生方は執務机に向かっているが会話は聞こえてもいいらしい。概略は「二人の女子生徒がべったりと二人の世界に入っていて他のクラスメートから遊離している。体育大会の出場種目を決める時間，二人は勝手に教室から出て行ってしまい，帰ってきたときにはクジで障害物競走に二人，Ｑ子さんとＲ子さんのうちＱ子さんが出場者の一人に決まってしまっていた。この競技に出場したい者は誰もいない。二人はなんとかＱ子さんが出場せずにすむようにしたいと，毎日担任に訴えに来ている。特に休み時間は担任の側を離れずに嘆き続けている」ということであった。＜Ｑ子さんとＲ子さんの二人だけの世界にＨ子先生が加わって，三人の世界になったのは進歩です＞「このまま，どうなるんでしょう。どうしたらいいのですか？」＜どうなるのか，不安でいることから興味に変えることはできますか？＞「ええ。少し興味がありますから」＜それだけでいいんですよ。三人の「３」は発展をはらんだ数ですからね＞

Ｈ先生教諭が出て行く。「どうなるのか楽しみになってきた」とＥ，Ｆ，Ｇ三先生も感想を言う。＜ときどきＨ子先生に声をかけて聴いてあげて下さい＞「わかりました」と三人。

私は学校の一日をエンカウンターグループの一日とイメージしてファシリテートした。午後には登場生徒がグループで保健室を訪れ，グループエンカウンターさながらの話し合いに発展した。生徒Ｔは原因不明の頭痛，深夜の風呂場の鏡に幽霊が映っていないかとの恐怖感を語り，本当の自分は人生をどう生きていったらいいか頭を痛めて怯えていることに気づいていった。生徒Ｏ君は進路選択の迷いを語り，好き嫌いを基準に選択できない自分に気づき，勇気が欲しいと言った。Ｐ子さんはアキレス腱の痛いのはカウンセラーに会いに行けとの神のお告げだったのかと言い，自分だけのカウンセラーが欲しいと言った。Ｅ，Ｆ，Ｇ三先生方は保健室がこの子たちのホームルームであったことを改めて認識したと語ったのだった。

学校全体を一つのエンカウンターグループ会場と見立てるならば，断続的に出会う人々の行動と心理が連続性のあるものだとわかるだろう。生徒たちは自分の一日，一生を断続的にとらえがちである。特に連続的な愛情の守りに支えられていない生徒たちはそうである。あそこに行けばきっとあの人が居て自分をわかってくれるだろうとの思いを育てることが臨床活動の要点と私は考える。

５　一日スクールカウンセラーの経験（その２）

上記の経験（その１）で述べた訪問校はいわば進学する生徒が多い比較的大規模な学校である。次に述べるのは山間部にある小規模な学校である。

始業一時間前に到着し，通学してくる生徒たちの様子を眺めようと待っていると，台風接近の天候で雨風が強くなってきた。その中を一人の男子生徒が自転車で山道を傘も差さずに登校してくる。遠距離通学生たちはバス通学なので地元生徒だろう。その後に徒歩でやって来る生徒たちが続く。男子はほとんど傘を持たずに悠々と歩いてくる。この学校には放任されて育ったけれども，そのおかげで野趣に富んだ気風を好んで集う集団があると感じた。

後刻，教頭先生にそのことを言うと，この学校には「やんちゃなタイプ」と「内気なタイプ」の対照的な二群があり，後者は前者に怯えて暮らしているのだそうである。「怯えて，やんちゃタイプのまねをして傘をささずに登校している子もいるのですね」と言うと，「そのとおり」とのことであった。「神経症タイプが非行タイプに学ぶとなおります」と解釈すると，「怯えから一時的に欠席がちになる子もいるのですが，登校するうちに，おっしゃるとおり，なおってきます」と言われた。教頭先生は生徒一人一人の問題点を記した一覧表と顔写真を示して全校生徒個々について解説してくださった。次いで授業参観に案内していただいた。すべての教室と体育館で行われている授業風景を観た。小さな学校なので簡単に済んだ。どの授業でも生徒たちの幼さ，人なつっこさを感じた。授業する先生方は，どの人も許容的で，手鏡で化粧している女子や漫画を見ている男子にも，それなりにアイコンタクトをとりながら教えていた。教頭先生も私を教室に招き入れ，しかもそれが教える教師にも親和的なので邪魔にならない自然さだった。

夕刻，全職員との懇談の席で，そのことを言うと「もっと厳しくしたいのですが，厳しくしたらろくなことが無いんですよ」と嘆く先生がおられたので，「あれが一番適切な授業だと思います」と言った。「もっと上手い授業の仕方があるはずだと悩んでいます」と更に嘆くので「そう悩んでおられることは，あなたがプロの教師であることの証拠です。私も毎日，悩んでいますから」と励ました。

昼食後，雨も止んだので外に出た。すると，茂った植え込みの隙間から校舎の下へ男子生徒が分け入ったのが見えた。不思議の国のアリスでウサギ紳士が急いで地下に通じる穴に入り，アリスがそれに続いて入るような気分で，私も続いて分け入った。そこには頭に剃り込みを入れたＵ君と携帯ＣＤを聴いているＶ君がくつろいでいた。薄暗がりの隠れ家みたいな雰囲気でウエイトリフティングのダンベルがあり，ここは「筋トレ場や」と教えてくれた。Ｕ君の頭は自分で剃ったのではなく散髪屋にしてもらったそうで，「この学校では，髪の毛を染めたらあかんけど，髪型はどんなにしても怒られへんねん」と，後頭部に尻尾のように編んだ髪型も見せてくれた。「おっちゃんは教頭先生の友達か？」＜今日，親しくなったけどな＞「おっちゃんも，頭に剃り入れたら？ハート型がいいと思うで」と揶揄されて，私の仕事がハートに関係あることを知っていることがわかる。Ｖ君はＵ君の先輩で３年生なので，空手部の現役を退いて部室を兼ねているこの筋トレ場を居場所としているそうだが，二人の会話は全く対等の，上下関係を表す言葉遣いでなく，彼らの語彙の稚拙さと未熟な社会性を感じたが，それだけに風貌と似つかない人なつっこさが可愛かった。

教頭先生の事前説明によれば，Ｕ君は自閉的な生徒から金をまきあげ，被害生徒の父親からなかなか許してもらえずに，土下座させられた一件の後，大人しくなったという。「最終のバスが６時半やから，乗り遅れたらヒッチハイクせなあかん」と言ったが，迎えに来てくれる親がいないこと，自閉症生徒が障害ゆえにもらっている大人からの愛情を盗りたかったこと，我が子のことで心底怒る親の存在に感じ入ったことがわかった。

学校を見立てること。見立てながら生徒と付き合うこと。その結果を基に教職員に伝えること。これがスクールカウンセラーの主たる職務であると思う。放課後の会議で，困難生徒を引き受ける場づくりを誇りとしようと再確認する教職員の発言に感激した。車で校門を出るとき，台風接近の強風で木の葉が舞い散る中を傘も差さずに下校している生徒の何人かが手を振ってくれた。

６　おわりに（インタレストのもたらすもの）

カウンセリング関係の一大要素として，カール・ロジャースは“unconditional positive regard”を挙げている。「無条件の肯定的関心」と日本のカウンセラーは訳している。“regard”とは「好意の眼差し」とも訳すことができる。では，好意の眼差しが「無条件」であるべし，とはどういうことなのか。

「条件」は父性原理である。「無条件」とは母性原理である。「良い子は我が子」は父性,「我が子は良い子」は母性であると河合隼雄は述べているが，カウンセラーが「我がクライエントは良い人」と無条件に思うことができたときに面接は進展するとロジャースは気付いた，と言うことができるのではないだろうか。

「面接が進展する」とは，クライエントがカウンセラーとの関係（カウンセリング関係）の中で変容していく動きのことである。カウンセラーとの出会いによって関係が動き，クライエントの心が動き変容していくのである。その変容を促す条件のひとつが，カウンセラーのクライエントに対する母性的好意の力なのである。このことはクライエントの変容が，母性によって成長する赤ん坊の成長のそれと質的に同じであることを示していると思う。

もちろん，クライエントは赤ん坊ではない。カウンセリング関係は母子関係ではない。クライエントは不適応状態に陥っている人であり，カウンセリング関係は適応を目指す関係である。そこに母子関係及び赤ん坊の成長と同質の要素を見て取ろうとすれば，不適応そのこと自体の本質が見えてくるだろう。

不適応とは「成長のやり直しの要請」である。これが不適応の本質なのである。不適応とはその人が周囲の環境になじめない状態を言う。と同時に不適応とは，その人が自分となじめない状態でもある，とも言うことができる。周囲の関係になじむようになるために，自分自身になじむことができるようになる必要にせまられている状況に陥っている人の状態を不適応状態と見るのである。とすれば，これは内的なやり直しである。

そこで，人が自分とのなじんだ状態を獲得する環境を考えてみれば，自分のことを無条件に，全面的に肯定し，愛してもらえる環境を想定することができるだろう。自己肯定感を持つことができる人は，周囲に対して肯定的なイメージを抱いていて，これをなじんだ状態だと言えるとすれば，その自己肯定感の源は赤ん坊の頃の母子のなじみ経験なのであり，母性の関与なのである。これを人工的に再現しようとするのがカウンセリング関係なのである。

さて，このきわめて個人的な人間関係であるカウンセリング関係を学校という組織に適用すると次のことが言えるだろう。

① 困らないと成長は始まらない。困ったことから逃げたり，ごまかしたりしたときに症状が出る。困った時に困ったことを聴くことがカウンセラーの仕事である。学校全体の困りごとを訴えてくる児童生徒・教職員・保護者とカウンセリング関係をつくることが先決である。

② カウンセリング関係は先述の無条件の肯定的関心によって創出できるが，そのためには，有機体が有する自己成長力への信頼を持つことである。信じる力は実践と成果の累積によって培われる。そのためにも，カウンセラーは物理的短時間の中に凝縮された高濃度の内的時間を創り出すべきである。

③ 変容は物理的時間とは無関係である。変容すべき条件がそろえば一瞬にして起こる。有機体は一部分の変化が全体に影響する。歯の痛みが起きた瞬間に肩はこり，熱は出る。逆に歯の痛みが消えた瞬間に他の症状がとれる。学校から相談に来る人，学校へ行くと話しかけてくる人が変容すると学校組織の変容が始まる。そのためには個と全体への見立てが必要であり，さらに洞察がカウンセラー側に起こっている

ことが重要である。

④　組織の症状の根幹に相当する人の気持ちを聞くことができれば短時間に組織の症状は回復し組織の成長が始まる。症状から遠い人にアプローチしなければならない場合には時間がかかる。肩こりを治療することによって歯痛を治すには時間が必要なのと同様にである。

さて，以上４つのポイントをさらに煎じ詰めれば「愛」の問題に収斂されてくる。愛された人は愛するようになる，との原理が根底に見えてくるだろう。私の述べてきた論は「愛の伝播」についてなのかも知れない。

ただし，愛と言ってしまえば究極的な言語（final　word）特有の，論理を寄せ付けないところがあるので，それこそ臨床的にカウンセラーの内面を見直す必要に駆られる。

果たして臨床家は「愛する人」なのだろうか，との命題にも突き当たるのである。

この命題はカウンセラーのみならず多くの教師の命題でもあるべきだと思う。つまり次のことを考えてみる必要があると思う。

①　母親の愛は本能的な母性及び愛着によって支えられている。カウンセラーや教師にはこれが無い。本能や愛着に基づくカウンセリングや教育はあり得ない。

②　カウンセリングでは，時間と空間と契約によって，個人的な愛着を禁止している。カウンセリング関係は独自の人工的人間関係なのである。なぜならば，愛の限界を知らなければ裏切られ感や恨みが発生する。クライエントの依存性を煽り，裏切ることが必然的に起きるからである。そこには真の成長は無く，退行・甘え・以前より激しい不適応が待っているだけである。このことは学校教育にも言えることであり，教師の自己愛がもたらす弊害は学校の注意事項でもあるだろう。

要するに愛着と依存を断ち切る強さに裏打ちされた関係が求められるのである。「無条件の肯定的関心」は限定的なものでなければならない。いわば「成長のやり直し」に必要な愛情は，逆説的な意味で条件付きなのである。

それにしても，個人対象のカウンセリングばかりでなく，学校を対象とするアプローチともなると，臨床家に必要な心のエネルギーはどのような性格のものであるのか，またそれはどこから得ることができるのか，という問題が残る。

その問題を解くキーワードは「インタレスト」ではないかと思う。なぜだろうか？という知的興味によって対象を考える。ああそうか！と了解すると同時に，また新たな疑問と探求と了解のプロセスが始まる。それが因果律で解けていく場合もあるし，全体を同時に洞察しなければ把握できない場合もある。常に「インタレスト」は尽きないし，了解は「インタレスト」の始まりなのである。

そのような意味で，人間に対する興味をベースとして組織の人々と関係を結び，その結び方が新たなインタレストを人々に呼び起こすことは一種の遊び心を喚起するのだとも言うことができるだろう。

最初の事例におけるカルガモ君たちはＡ先生の遊び心によって生きた心地を取り戻し，適応への成長を遂げることができたようである。Ｂ先生はカウンセラーに相談することによって，自分の夢の理解を果たし，生徒たちへの感情を表出することができた。これも，夢と現実の交流という意味で遊び心の経験であった。

一日スクールカウンセラーで，筆者は高校生たちと遊んでいる。正確に言えば，筆者は高校生に遊ばれている。カウンセラーを相手に生徒たちは遊び，自分の遊び心から生きるエネルギーを発生させていったようである。

「３対集団の理論背景」でシステムズアプローチについて述べたように，コミュニケーションパターンを変える方法も遊び心によって開発されているし，その結果として家族が遊び心を発揮しはじめるのである。

水は永く滞ると腐る。流動すると新鮮に蘇る。心も同様である。これが集団に起こるための働きかけは，これまで論じてきたとおりであるが，心理臨床家自身の心的エネルギーは流動する遊び心によって補給され続けていなければならない。

＜参考文献＞

・藪添隆一「書評 システムと進化（Ｌ・ホフマン著　亀口賢治訳　朝日出版)」『心理臨床家のための１１９冊』創元社(1992)

・藪添隆一「学校カウンセリング」『心理臨床大事典』培風館(2004)

・藪添隆一「学校での心理臨床活動理解の深化拡大」『河合隼雄他監修　学校の心理臨床』金子書房(1999)

・C.R.ロジャース「十分に機能している人間」『村山正治訳　ロージャズ全集１２』岩崎学術出版社(1967)

・東山紘久『スクールカウンセリング』創元社(2002)

・河合隼雄『母性社会日本の病理』中央公論社(1976)

・河合隼雄『中年クライシス』朝日新聞社(1993)